

# とく



2017年9月16日  
NO.555



「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部  
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号 東海教区教務所内  
TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097 info@tokai-hongwanji.net

## 名古屋組活動紹介

名古屋組は、平成元年まで『尾張組』という名称であった事から分かる様に、尾張地域の38の寺院で構成されています。

名古屋組におきましては、過去から現在に至るまで『組連研』を開催した事はありません。そこで将来の『組連研』開催に向けて、『連研研修会』という形で、模擬的に年1回もしくは2回開催しております。今年度は、去る7月3日に別院ホールに於きまして、ご講師に海幡組の小野正信さんをお招きして開催し、組内僧侶・門信徒の方々合わせて、35名の参加がありました。テーマは、過去の研修会の中で参加者の方々から頂いた疑問・質問の中から選んでおりまして、今回は『念仏を申す人生を歩む』でありました。伝灯奉告法要におけるご門主様のご親教を通して学ばさせて頂きました。

しかし残念ながらこの『連研研修会』から一歩進んで、正式に『組連研』を開催しようという機運が様々な理由により、盛り上がっていないという現状があります。今後に向けての課題であると考えています。

また教化団体としましては、組寺族青年会が若手僧侶の親睦と情報の共有を目的として旅行や懇親会等を企画しています。この寺族青年会を入り口として、より多くの若手僧侶が、組の活動に積極的に参加してくれるようになる事を願っています。



### Contents

組活動紹介	P1
こころばなし(法話)	P2
声	P3
特集「ハクビシン騒動」	P4
坊さんの書棚	P6

# 「いつでもどこでもの心」

楠原純悠（中勢組西向寺）

「じいちゃんばあちゃん」

私が大学2回生の頃にゼミで勉強させていただいたのが正信偈です。正信偈の御文を四句ずつに区切って、それぞれの言葉がどういう意味であるのか、ということを知りたいと学生が調べてきてみんなの前で発表するというのをしました。

ある日、ゼミの発表で少し気になる語句がありました。その語句はといいますと「憶念弥陀仏本願」と御文にあるのですが、その『憶念』という言葉です。

この『憶念』を調べてみると、「常に心に思いとどめて忘れないこと」とあります。その時のゼミでも発



表者はそのように説明をしました。でも、ご飯を食べている時でも、テレビを見ている時でも阿弥陀様のことを思い続けることなんてできるのかな、この憶念とはもしかしたらとても難しいことなのではないかなと私は感じました。そこで発表した人に質問したのですが、納得のいく答えは返ってきませんでした。今思えば言葉の意味を調べてくる発表に対して答えにくい嫌らしい質問だったなと思います。

しかし、代わりにゼミの先生がそのことに教えてくださいました。「憶念とは親の顔を思いうかべるようなものである。たとえ親と何日も会っていなくても、いつ思いうかべても同じ顔がうかんでくる。憶念もこれと同じだ。」とおっしゃいました。つまり思い続けて忘れないというのは常に考え続けることではなく、いつ思いうかべても全く変わらない同じものがうかんでくる、ということだったのです。

では、なぜいつ思いうかべても、親の顔は全く変わらずに同じものがうかんでくるのでしょうか。それはやはり一番私のことを思ってくれるからではないのでしょうか。私ももう立派すぎるほどの大人の年になったにもかかわらず、私の母は何かと世話を焼きます。恥ずかしいからやめてと言っても、余計だと思っても何でも口を出してきます。私にどう思われてもやめずにはおられない思いをかけてくれるのが母です。そんな母のいつでもどこでも私のことを気にかけるという気持ちがあるからこそ、私に常に変わらずその顔を思い浮かべさせてくれるのです。

阿弥陀様もこの私に必ず救う、我にまかせよと呼びかけてはたらいてくださいています。私が阿弥陀様の事を忘れて何かをしていようと、阿弥陀様の方はいつでもどこでも私の事を忘れずにはたらいてくださいています。

『憶念』とは私が阿弥陀様をいつでも思い続け忘れないことではありませんでした。阿弥陀様が常に私を思いはたらいくださるからこそ、私が縁に触れたときに阿弥陀様を思うことができる、その心でありました。

私を忘れることのない阿弥陀様がいらっしゃることを大事に日々の生活を精一杯過ごしてまいりたいと思います。



## 「ふるさとと孤独と中島みゆき」

# 声

### 読者のページ

最近、中島みゆきをよく聴いている。言うまでもなく紅白2回出場の国民的歌手である。近年は仏教のご縁ということをおぼせる『糸』などが寺院関係でよく歌われているようだ。私は高校生の頃から、両親のカセットテープなどで彼女の歌を知り愛聴するようになってはいたが、ご法義にであったことと、さまざまな人生経験を経たことでさらに深く魅了されるようになっていく。

彼女の曲、特に『わかれうた』などの初期の曲は失恋や嫉妬などの曲が多いと思われるが、よくよく聴いてみるとそこにもっと普遍的な、帰る場所のない人間の孤独を歌っているように思う。「ふるさと」や「家」を失い、帰る場所のなくなった人々。都会人の叶うことのないふるさとへの郷愁を歌った『ホームにて』や、外国から日本に出稼ぎに来た女性の孤独と死を歌い、あの世への入り口を覗きこむような迫力の『エレーン』『異国』などは特にそう感じる。私たちは誰もが、遅かれ早かれ「ふるさと」や「家」を失い、孤独になる。その孤独を深く理解した上で、優しく包む愛情が彼女の歌には感じられるのだ。お寺もわたしたちのほんとうの家「お浄土」の玄関口として、人々の孤独を受け入れ、優しく包む場所になりたいと、彼女の歌を聞くたびに思う。

## 「マラソンと人生」

学生時代以来のランニングを再開して、1年に一度は大会にも参加するようになりました。今年の秋もフルマラソンを走る予定です。人生はマラソンに例えられることがあります。果たしてそうでしょうか。

確かに似ているところもたくさんあります。予定していたペースで想定以上に疲れを感じたとき、判断を迫られます。無理をしてでもそのままのペースを刻むのか、先を見てペースを落とすのか。これは仕事や家庭などでの人生の一部分と重なってくるように思います。

私はプロの選手ではないので、当然順位に拘る必要はありません。自分との戦いです。けれど同じくらいのペースのランナーと、ずっと近くで走り続けていると意識が向いてしまうものです。時には仲間意識であり、時にはライバル意識となります。疲れ切った最終盤に、途中で置き去りにしたはずのライバルに抜き返されると、どっと気落ちします。こうしたところも人生と重ね合わせることができるでしょう。

何度もフルマラソンを走っていますが、人生とは違う部分も感じています。マラソンには明確なゴールがあります。私はレース終盤、「ゴールまで〇〇km」という看板を励みに走っています。今のところ、私には「人生のゴールまであとどれくらい」という看板は見えていません。

走り続ける中での、新たな気づきや深まりに期待をしながら、今年の秋のレースに向かって練習していきます。



今年の夏は蒸し暑い日々が続きました。法務から帰ると汗だくで、白衣が湿って重く感じることもしばしば…。着替えて顔を洗い、一息つくのがいつもの流れなのですが、今年は「顔を洗える」ことを変に意識してしまいます。

…と云うのも、2月にあったある騒動に端を発しております…。

## ○暁の侵入者!?

2月初頭、とある原稿を抱え徹夜をしていた私に「ちょっと来てくれやん?」と坊守から声が掛かったのは朝5時過ぎでした…。訊ねると、御堂の唐戸を開けに入ったら堂中に「猫がおる」とのこと追いで出して欲しいと依頼されました。

御堂に行くと、ご開山の御厨子の中に黒い影が…。懐中電灯で照らすと、キラリと光る眼と額から鼻にかけて白い筋が…。「これ、猫ちゃん。ハクビシンやん。」

## ○対峙、逃走、格闘、そして…

間近でハクビシンを目にするのは初めてのコト。どう対処したものかと思案していると、御厨子から飛び出して南の余間へ逃走。追いかけると七高僧のお軸の横を垂直方向へ。壁面に爪をたてて登りつつ移動していく様子に感心しつつ、壁に穴が開くのではとハラハラ…。

近付くとハクビシンは壁面から飛び降り、私の入ってきた庫裡との出入り口へと一直線。自分の思慮不足を後悔しつつ、慌てて後を追いました。

幸い、庫裡へつながる戸は全て閉まっていたので、廊下でつながる書院方面へ逃走。行き止まりへ追いつめると、壁面を上り窓のブラインドの上に。

少し離れて様子を窺うと、ハクビシンが下へ降りてきました。油断しているトコロを飛び掛りましたが敵もさるもの、素早く身かわそうとします。逃がすまいと左手で必死につかんだところは尻尾でした。「意外にフカフカだなあ」などと余計なことを思っていると、ガブリ…と左手に咬みつかれました。

「痛っったああ」思わず左手を離した際に、またも逃走開始。必死に後を追うと、来た道に戻って開けておいた戸口から外へ出ていきました…。

## ○めくるめく初体験

戸口を閉めて、坊守にハクビシンを追出したことを報告。左手から結構な量の出血をしていたので、傷口の確認するために水で洗い流す。左手の掌と甲に2つつつ計4ヶ所、牙であけられた穴を確認。深くはないが血が止まらないので、手首を縛って病院へ行くことに…。

歩いて10分程の所に総合病院があるので、救急車が来る前に着くと思い、徒歩で向かいました。病院の夜間窓口でハクビシンに咬まれた旨を話すと、「今、外科の先生いないんで、何もできませんよ」…耳を疑いました。

えーと、傷口の確認とか消毒とかも出来ないんですか?そーですか。今見てもらえる病院を紹介頂くことも…、ああ出来ない。えと…居てもどうしようもないので帰れと…そーですか。トボトボ徒歩でお寺に帰る。

血は止まってきましたが菌やウイルスに感染していることも考えられるので、今度は救急車を呼びました。何気に初救急車です。

救急車で病院へ搬送され、傷口の消毒と抗生物質の注射・点滴を受けました。これも初体験です。ちょっと楽しくなってきました。



おおごと

## ○そして大事に…

医師の診断によると、咬まれた傷自体は浅く、大したことないので心配いらなとのコト。抗生物質を投与したので破傷風などの心配はいらないが、野生動物は狂犬病ウイルス持っている可能性があり、発症するとほぼ致死率100%なのでワクチンは受けた方が良くと云われました。

「じゃあ、受けます」「ワクチンがある病院は、近隣では名古屋か津のどちらかです。」「へっ??」「今日中に行って下さいね」「今日は無理です」「じゃあ、明日行って下さい」「はあ…(そんなんでいーのか)」「全6回で保険効きませんけど…、紹介状書きますね」

「ええっ…(今サラッとスゴイこと云ったよーな)」…てな訳で、津市の国立三重病院へ通うことになりました…。

## ○狂犬病について

翌日、法務の関係で夜間外来で受け付けてもらいました。狂犬病に関する説明を受けてからワクチンを接種しました。

教えて頂いたのは、接種初回を0日と数え、3日・7日・14日・30日・90日後と間隔をあけて接種すること。日本国内での発症事例が30年前のため、あまり研究がなされておらず、薬の改良に乗り出す製薬会社もなく全6回接種となっていること。野生動物への調査も行われていないため、実態の把握が進んでいないこと。ワクチン接種の有無に関わらず、咬まれたらまた数回に分けての接種が必要なこと(以前の接種からの年数で回数が変わるそうです)。



何より驚いたのが、ワクチン接種を担当しているのが小児科だったこと。おっさんがひとり、子どもに交じって名前を呼ばれるのを待つ…独特の居心地の悪さを感じつつ90日間通いましたよ。担当医師と他愛無い世間話でもりあがったり、美味しいランチの店を開拓したりと、それなりに楽しんでましたが…(笑)ちなみに、保険はききました(ホッ)

最終の6回目の接種の後、担当医師から注意点を聞かされました。

ワクチンが効かなかった事例は確認されてはいないが、狂犬病ウイルスの潜伏期間は最長で2年程あり、万が一発症した場合、極端に水を怖がってパニックを起こす“恐水症状”が顕著な例として見られる。本人には無自覚に起るので、家族にその旨を伝え注意してもらうことで、早期に症状を把握し、最寄りの大きな病院を受診し、経緯を説明して指示を仰ぐこと…とのことでした。まだ続くのかこれ…。

…そんな訳で、自覚して「顔を洗える」ことに胸を撫で下ろす次第です…。



## 『縮小ニッポンの衝撃』

著者 NHKスペシャル取材班  
発行 講談社現代新書

2016年9月に放送されたNHKスペシャルを新書化したもの。日本の将来の人口減少とそれに伴う影響を赤裸々に伝えている。その内容はどこまでもネガティブでショッキングだ。

2015年の国勢調査によると我が国の総人口は1億2709万人。5年前の調査と比べて約96万人が減少した。国勢調査の歴史上初めての減少だ。予想では2053年には1億人を切り、2065年には8808万人になると言う。しかも人口減少と並行して、急速な高齢化が進む。2025年には5人に1人が75歳以上の後期高齢者が占める超高齢者社会に突入する。

日本の将来はどうなるのか。それを示しているのが北海道夕張市だ。夕張市の人口比率は40年後の日本の人口比率に酷似している。夕張市は過酷な借金返済と前例のない住民サービスの切り詰めを余儀なくされている。夕張市の現状は対岸の火事ではないのだ。

地方だけではなく、東京でも2025年をピークに人口減少が始まる。特に池袋を抱える豊島区は「消滅可能性都市」に挙げられている。この他、島根県雲南市・益田市、京都府京丹後市の、エピローグとして横須賀市の現状が紹介されている。横須賀市では真面目に生きた人が誰に看取られることなく亡くなり、遺骨の引き取り手さえいない高齢化社会の現実が紹介されている。

この過酷な現実をふまえてどうしていくのか。一人ひとりが現実に向き合い、痛みを分かち合いながら「撤退戦に身を投じていくしかない」、とまとめられている。生き残れるお寺はどれだけあるのだろうか。刺激的な一冊である。



## 『誰がアパレルを殺すのか』

著者 杉原淳一／染原睦美  
発行 日経BP社

刺激的なタイトルに目を引かれて手にとった本書は、かつてない不況にあえぐアパレル（衣料品）業界を丹念に取材した一冊である。現在のアパレル業界は、素材の生産現場と商品企画、販売現場が分業体制になり、業界全体の問題を誰も把握できないまま場当たり的な解決策に終始していると指摘する。日本のアパレル業界は1960～70年代に黄金期を迎える。「消費は美德」が国民的スローガンとして成立し、百貨店で既製服を買うという行為自体が時代の最先端となった。しかし一方で、洋服を作れば作るだけ売れた時代の栄光によって、消費者のニーズより内輪の論理を優先する思考停止に陥ってしまう。それが不況の原因だというのである。

ただ、不振の業界にあっても業績を伸ばす新興勢力も存在する。1つはITを武器に既存のルールに縛られることなく、無店舗販売やレンタルなど新サービスを展開する業界「外」から参入してきた企業である。いま1つは業界の「内側」からも従来の慣習を破り支持を得る企業も紹介されている。

栄光の時代を引きずって内輪の理論に終始しているのはアパレル業界だけではないと、読み進めていくなかに感じさせられた。

誰が  
アパレルを  
殺すのか杉原淳一／染原睦美  
Junichi Sugihara / Mutsu Someno

日経BP社